

令和7年度
小学校外国語活動・外国語科研究集録
(教員研修実践報告集)

第15号



2026. 3

愛媛県教育研究協議会 外国語委員会
(小学校外国語活動・外国語科部会)

目 次

はじめに

I 研究の方向性（令和7年度研究の手引きより）…………… 4

II 第10回愛媛県外国語教育研修会 …………… 8

○ 講演

「外国語教育（英語教育）について考える一日」

愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 様

○ アンケート集計結果 …………… 12

III 教員研修実践報告

○ 西条支部の取組 …………… 19

○ 今治・越智支部の取組 …………… 21

○ 東温支部の取組 …………… 23

○ 上浮穴支部の取組 …………… 25

○ 附属支部の取組 …………… 27

○ 八幡浜支部の取組 …………… 29

○ 西宇和支部の取組 …………… 31

○ 北宇和支部の取組 …………… 33

○ 南宇和支部の取組 …………… 35

IV 研修実践を振り返って …………… 37

おわりに …………… 38

小学校外国語活動・外国語科部会役員名一覧表 …………… 39

はじめに

令和2年度の小学校外国語科全面実施から6年が経ちました。外国語活動や外国語科における子どもたちの学びも確かな変化を見せています。目的・場面・状況に応じ、自分の思いを主体的に表現しようとする子どもたちの姿は、外国語学習が本来もつコミュニケーションの価値を改めて教えてくれます。

こうした学びを支えるためには、単に表現活動を増やすだけではなく、「主体的に学びに向かう姿勢」、友達と関わりながら考えを深める「対話的な学び」、その過程で見出される「深い学び」をどのように実現するかが重要です。小学校外国語科における「深い学び」とは、知識の量を増やすことではなく、言語の働きやコミュニケーションの本質に気づき、学んだことを新しい場面で活用しようとする姿にこそ表れます。音声に耳を澄ませ、語順や表現の違いに気づき、友達とのやり取りの中で自分の言葉を調整していく過程そのものが、「深い学び」の核心であると考えます。

本研究集録には、こうした学びを実現するために、教師が授業の目的を精緻に捉え、場面や状況を丁寧に設定しながら実践を積み重ねてきた記録が収められています。言語活動の充実、評価と指導の一体化、相手意識や目的意識を育む工夫、中間指導の在り方、ICTの活用、小中連携など、多様な視点からの研究・実践が集まりました。これらの記録と考察が、読者の皆様の授業づくりに新たな示唆をもたらし、子どもたちの学びをさらに豊かにする一助となることを願っています。

最後になりましたが、本委員会の研究活動に対してご理解とご支援を賜りました関係の皆様に関心から深く感謝を申し上げます。

令和8年3月

愛媛県教育研究協議会外国語委員会
副委員長（小学校部会長）

桐山真美

I 研究の方向性（令和7年度研究の手引きより）

（小学校）

外国語活動

I 研究主題

主体的によりよいコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

II 研究のねらい

予測困難で急速な変化に満ちた社会はVUCAの時代と称される。ICTやAI等の進展による多様な課題も生じている今、一人一人が社会の担い手となり、共に生きる幸せなコミュニティをつくろうとするウェルビーイングの意識が重要である。その実現に向けて外国語教育に求められるものは、他者とのよりよいコミュニケーションを主体的に求めたり、異なる言語や文化をもつ人々との協力・共存のために、対話を通して深く学んだりしようとする資質・能力の育成であると考えられる。

そこで、小学校中学年の外国語活動においては、高学年外国語科への接続を踏まえ、発達特性に即して、一人一人が個性を活かしたコミュニケーションのよさや楽しさ、成就感を得ることのできる活動を工夫する。また、友達や地域社会、日本、更に世界へとつながる多様な他者との豊かな対話を通して深く学ぶために「コミュニケーションを行う目的・場面・状況」の設定を行う。これにより、子どもがもつ柔軟な適応力を生かしながら、子どもたちが外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむとともに、自国や異なる国々の言語や文化について、体験的に理解や思考を深めていくことを目指す。

III 研究の視点

（【 】は愛教研「主体的・対話的で深い学びに向かう授業」モデルと主に対応するものを示す。）

1 子どもの実態や発達特性に即した指導計画の作成

- (1) コミュニケーションを図る必要感の分析と「言語活動」の開発【A・B】
- (2) 異文化への関心を深め、視野の広がりや他教科等との関連を考慮した指導計画の作成【E・F】
- (3) 学年間・校種間における目標の連続性を捉えた指導計画の作成【F】

2 多様な体験を生かした学習指導の工夫

- (1) 「コミュニケーションを行う目的・場面・状況」の設定の工夫【C・G・J】

- (2) 外国語の音声への十分な慣れ親しみを基にした、文字との出会いづくり【D】
- (3) 1人1台端末等のICT機器やデジタル教材およびAI・アプリ等の効果的な活用【I】
- (4) 学級担任・外国語専科教員のコーディネートによるALT・アシスタント等との連携【H】

3 主体的な学びを支える評価の研究

- (1) 実態に応じた振り返りの内容や活用方法、また、その手立ての工夫【K】
- (2) 教師の見取りを子どもの新たな学びや意欲につなぐ評価の在り方【L・M】

4 小中・小小の連携

- (1) 小・中の目標や学習内容、指導方法及び系統性の理解を深める研修の実施【N】
- (2) 児童・生徒の実態や教材についての積極的な情報交換の場の設定【O】

IV 留意事項

- 外国語活動と外国語科のつながりを見通し、領域と教科の相違点に配慮して、初めて学ぶ子どもにとって、無理のない学習内容になるよう配慮する。
- 外国語活動と国語科とのつながりに留意し、同じ「言葉の学習」として相互に学習の意義が深まるようにする。
- 外国語活動で取り扱う内容と、各教科・総合的な学習の時間・特別活動等との関連を図り、相互に指導の成果が高まるようにする。
- 日常生活の中にあふれる外国語への気付きを大切にし、音声への慣れ親しみを重視する。
- 文字の名称や音への自然なつながりを促し、文字を知る喜びをもって取り組むことができるような授業を構成する。
- 学級担任・外国語専科教員・ALT・アシスタントとの円滑なコミュニケーションと役割分担を効果的に取り入れ、より望ましいモデルを示し、子どもの主体的な意識を高める。
- 学習指導要領における目標を踏まえ、育てたい「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」を明確にし、求められている授業イメージの共通理解を図るために、全教職員による積極的な研修に努める。
- 同じ中学校区にある小学校及び中学校の連携の場を設けたり、オンラインセミナーを開催したりするなど、教職員間・校種間・地域間の情報交換や交流を推進する方法を工夫する。

(小学校)

外国語（英語）

I 研究主題

よりよいコミュニケーションを主体的に求め、多様な対話を通して深く学ぶ児童の育成

II 研究のねらい

予測困難で急速な変化に満ちた社会はVUCAの時代と称される。ICTやAI等の進展による多様な課題も生じている今、一人一人が社会の担い手となり、共に生きる幸せなコミュニティをつくろうとするウェルビーイングの意識が重要である。その実現に向けて外国語教育に求められるものは、他者とのよりよいコミュニケーションを主体的に求めたり、異なる言語や文化をもつ人々との協力・共存のために、対話を通して深く学んだりしようとする資質・能力の育成であるとする。

そこで、小学校高学年の外国語科においては、中学年の外国語活動で育成された素地をもとに、発達特性に即して、児童が主体的にコミュニケーションを求めようとする学習活動を工夫する。また、他教科等で得た学びや手立てを活かして、「コミュニケーションを行う目的・場面・状況」を工夫した「言語活動」を設定し、多様な他者との豊かな対話を通して深く学んだり、学びの意味を実感したりする児童の姿を目指す。これにより、以後、必要とされる他者理解や自己表現の力、人間関係形成力の伸長や、中学校における外国語科への接続が円滑になることが期待される。「言語活動」の意味や意義を適切に理解し、支援や指導につながる評価の在り方を工夫することで、苦手意識をもつことなく、中学校への期待をもって学び続けようとする児童の育成についても研究していく。

III 研究の視点

【 】は愛教研「主体的・対話的で深い学びに向かう授業」モデルと主に対応するものを示す。）

1 目標・内容の理解

- (1) 校種をわたる目標・内容・活動・教材の連続性への理解と研修の実施【C】
- (2) 外国語活動から外国語科につながる実態に即した年間指導計画の研究【F】

2 指導方法の研究

- (1) 「コミュニケーションを行う目的・場面・状況」を具体的に設定した見通しのある「言語活動」や学習場面づくり【A・B・G・J・K・L・M】
- (2) 外国語の音声への十分な慣れ親しみを基にした、文字の活用場面づくりと指導【D】
- (3) 学級担任・外国語専科教員のコーディネートによるALT・アシスタント等との連携【H】

3 評価の工夫

- (1) 外国語科5領域における評価の3観点理解に基づくCAN-DOリストの研究【C】
- (2) ワークシート・振り返りカードや、1人1台端末等のICT機器、およびAI・アプリ等の活用による多様で効果的な評価の工夫【I】
- (3) 感性・思いやり等を捉えた形成的評価による、自己肯定感や多様な可能性の伸長【H】

4 他教科等との関連

- (1) 外国語学習の意欲と効果を高めるための他教科等との関連【E・F】
- (2) 国語科(日本語の音・語順・文構造等)との比較による効果的な指導場面づくり【F】

5 小中・小小等の連携

- (1) 小・中の目標や学習内容、指導方法や活動形態、及び系統性の理解を深める研修の実施【N】
- (2) 児童・生徒の実態や教材についての積極的な情報交換の場の設定【O】

IV 留意事項

- 外国語活動と外国語科のつながりを捉え、既習事項が子どもにとって意味あるものとして生かせるようにする。
- 各教科・総合的な学習の時間・特別活動等との関連を図り、相互に指導の成果が高まるようにする。
- 音声言語への慣れ親しみを基に、「コミュニケーションを図る目的・場面・状況」に応じた書く活動(なぞる・書き写す)ができる授業を構成する。その際、児童の学習負担や、ローマ字との混同による戸惑いに配慮して取り扱うようにする。
- 1人1台端末やデジタル教科書、デジタル教材、情報通信ネットワーク等の活用により、児童の実態に応じた個別最適な学習の在り方を工夫する。
- 学級担任・外国語専科教員・ALT・アシスタントの円滑なコミュニケーションと役割分担を効果的に取り入れ、より望ましいモデルを示し、子どもの主体的な意識を高める。
- 学習指導要領における目標を踏まえ、育てたい「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」を明確にし、求められている授業イメージの共通理解を図るために、全教職員による積極的な研修に努める。
- 同じ中学校区にある小学校及び中学校の連携の場を設けたり、オンラインセミナーを開催したりするなど、教職員間・校種間・地域間の情報交換や交流を推進する方法を工夫する。

II 第10回愛媛県外国語教育研修会

○ 講演

「外国語教育（英語教育）について考える一日」

愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 様

1 自己紹介

1973年7月3日生まれ、茨城県出身。兵庫県で教職に就き、英語教師として活動する傍ら、大学院で学び直す。ICU（国際基督教大学）で再び学び、栃木県の足利工業大学（現・足利大学）で法学部の共通教育を担当した。2000年代初頭、愛媛大学ではネイティブスピーカー中心の授業を展開するという英語教育改革を進めていたが、徐々に日本人教師も再び加わるようになったことや英語のみによる授業展開に興味をもち、2019年から愛媛大学へ移った。英語のみで授業を行うことで、英語が苦手な学生が課題や授業の目的を理解できずに取り残される問題を認識した。情報保障の重要性に気付くとともに、日本語での補足説明を交えた授業の必要性を感じ、英語教育センターでの活動に取り組むようになった。

2 現在の社会状況と英語教育

(1) 愛媛大学における英語教育体制の変化と背景

愛媛大学では、2023年度末に英語教育センターが廃止され、新たな英語教育体制の構築が進められている。1年生の英語学習では、リスニングやリーディング等の情報処理に関する受容的スキルはeラーニングに移行し、質問対応はオフィスアワーで行われている。一方、スピーキングは対面授業を継続し、少人数制（約20人）に変更されたことで、教員の負担軽減と指導の質向上が実現した。

この改革は、コロナ禍を経て教育環境が大きく変化したことを背景にしている。Society 5.0（創造社会）の到来により、教育の目的や方法が再定義され、教員の役割も「教える人」から「支援する人」へと移行しつつある。

(2) 人口の推移と社会環境の変化

日本の18歳人口は平成4年の約120万人から、令和7年には約109万人に減少している。話者が60歳になる令和15年には、その数が約40万人と、平成4年当時の3分の1にまで減ると予測されている。文部科学省の推計では、出生数は今後50万人前後で推移する見込みであり、学校数や教育の在り方にも大きな影響を与えられられる。一方で、不登校児童・生徒の数は増加傾向にあり、愛媛県では令和元年から令和4年にかけて倍増した。コロナ禍や社会的環境の変化により、学校以外の学びを選ぶ児童・生徒も増えている。

このような社会的環境において、どのような目的で、どのような方法で児童に英語を教えたらよいかを考える必要があり、こうした状況は教育の目的や方法を根本的に見直す契機となっている。

(3) コロナ禍+αが英語教育にもたらした変化

少子化に伴い教員数が減少する中、AIの導入が加速している。AIは学習者のスタイルに合わせた指導や評価を可能にし、個別最適化された教育環境を提供する。一方で、言語学習の本質である人間同士の対話が失われる懸念もある。現在、スピーキングの添削が可能なAIも存在しており、児童・生徒へどのような支援をすべきか、また教師としてどのような

役割が果たせるかを考えさせられる時代でもある。教育の目的を見失わず、テクノロジーとのバランスを保つことが重要である。

現在は、**Society 5.0**（創造社会）と呼ばれており、新しい価値観を創造するために価値観を変えながら対応すべき時代である。英語教育だけについて考えるならば、以下のことが時代に沿う教え方として挙げられる。

- ① VR（同期） / オンライン（同期）
- ② eラーニング（非同期型オンライン）
- ③ 対面（同期）

オンラインは、教師・学生の確保や合理的配慮を可能にする。しかし、この学習方法は互いの表情が見えづらく、言語的な気遣いや態度を学ぶ機会が確保されていない。そのため、構造化されたパターンの会話を、限られたタイミングで素早く返す力を学ばせるという形が取られることもある。非同期型オンラインにおいても、居住地の考慮は必要ない。この方法は、**IRT**（項目対応理論）を利用することで、学生の特性に合った問題が瞬時に提供されるという学びの個別最適化も可能であるという利点がある。また、**AI**を活用することで、教授法と学習スタイルをマッチングすることも可能である。対面による学習では、細やかな表情、感情の変化が分かりやすいため、非言語的なコミュニケーション能力の向上が期待できる。これまでは基本的に対面による学びが主であったが、様々な学習の仕方により英語教育を展開していくことが求められる。

英語教育は、この **Society 5.0**（創造社会）を支える「創造を支える言葉の教育」として、柔軟かつ創造的な対応が求められている。

3 会話の構造

(1) 愛媛大学における実践的英語授業の展開

本研修会では、1年生向けの教科書を使いながらユニット1を実際に体験し、会話の構造を理解することの意味について考える時間とした。

愛媛大学では、英会話の構造に焦点を当てた授業が展開されており、教科書の各ユニットの始めには、**Aims** と **Goals** が明確に示されている。ユニット1では、「会話の始め方・話題の振り方・終わらせ方」を中心に、知っている人・知らない人への声掛けの違いや、社交辞令を含む自然な会話の流れを学習する。英会話の構造は以下の4点にまとめられる。

- ① **Greetings**
- ② **Small Talk(Chatting)**
- ③ **Pre-Closing**
- ④ **Closing**

相手との関係性によって、挨拶の表現は変わってくる。また、日本語での会話においても気に入った表現を使うことが多いため、**Greetings** では、自分が言いやすくしっくりくる表現を使おうとする気持ちを持たせることが大切である。大学の授業では、ペアワークやグループワークを通じて、挨拶や自己紹介、スモールトークの練習を行い、表情や視線などの非言語的要素も重視している。授業では他の表現も提示するが、「全ての表現を覚える必要はない」と伝え、試験重視の学習から脱却させている。自分に合った英語表現を選択し、自然なコミュニケーションを目指すのがよい。また英会話では、話題を振ると、聞き手はリスナーエクスペリションを返すことが多く見られる。そこでユニット1以降でも、自分らしい言葉を身に付けることが大切であり、定型表現にこだわらず、ナチュラルな言語習得を促している。会話の終わらせ方は学生にとって課題である。**Pre-Closing** をしてから **Closing** をする際には、いくつかの表現を織り交ぜて使うなど、会話をいきなり終わらせないよう表現を

習得させている。

(2) Small Talk について

愛媛大学では、学生が自らスモールトークの話題となる質問を考え、実際にペアやグループで会話を行う活動が展開されている。活動の目的は、自然な英語表現を使ってスモールトークを実践し、相手の特徴や話題を把握することである。大学では、愛媛県出身以外の学生も多いため、地域や季節に応じた話題（例：夏休みの予定、地元のおすすめスポット、食べたいものなど）を自由に設定し、3分間で質問を作成する。その後、隣の人と内容を確認し合うことで、表現の自然さや伝わりやすさを磨いている。そして、5人の異なる相手に声を掛け、知っている人・知らない人それぞれに適した挨拶や自己紹介を行い、スモールトークを交わす。その際、「オレンジが好きな〇〇さん」「飲み歩きが趣味の〇〇さん」等、具体的な情報をメモしておく。活動の最後には、会話を自然に終えるための表現（例：次の人を探す、別れの挨拶）も学び、実践的な英語コミュニケーション力を育成している。最初はペアで練習し、自信を付けたあとに、知らない相手にも声を掛けるステップへ進む段階的なアプローチにより、安心して活動に取り組むことができる。

スモールトークの活動後には、会話した相手について簡単なレポートを作成し、グループ内で共有をする。その際、「〇〇さんは松山出身でビーチが好き」「〇〇さんはオレンジが好きで、飲み歩きが趣味」等、具体的な情報を英語で報告する。挨拶（グリーティング）から会話の終わらせ方、そしてライティングまでを一連の流れとして学習することで、聞く力・話す力・書く力を統合的に育成し、英語を通じた人間関係の構築と言語運用力の向上を目指している。

(3) まとめ

ユニット1では、大学生が新学期を円滑にスタートできるよう、会話の構造を意識した授業が展開されており、外国語での練習を通じて、日本語での会話構造にも意識が向くように工夫されている。初対面で名前を聞く際には、いきなり質問するのではなく、まず自分から挨拶や自己開示することの重要性を指導している。これは「不審者に見えないようにする」社会的マナーである。また、教科書に載っていない表現も取り入れ、雰囲気や感情が伝わる言葉を育てるように意識し、言葉の正確さだけでなく、相手との距離感や空気を読む力を養うことを重視している。

英語で会話構造（挨拶・話題の展開・終わり方）を学ばせることは、小学生・中学生にとっても有意義であるが、小中学校では会話の始め方や終わらせ方を体系的に教える機会が少なく、時間的・内容的な制約もある。小学校では、挨拶や「ありがとう」といった基本的な表現がまず大切とされ、子どもたちが自然と言えるようになることが目標である。中学校では、チャット形式のやり取りを重視し、会話の開始と終了の表現が研究されている。会話は人との関わりの中で生まれるものであり、教育の場ではタイミングを見て情報提供や指導を行うことが望ましい。交流活動や発展的な場面で使える表現を紹介し、使いたい子どもが自然に使えるようにする柔軟な指導が求められている。

4 聞き取りと発音（文字と音の関係）の指導の必要性

日本語（カタカナ語）と英語の音節の違いについて考えた。母音（v: vowel）と子音（c: consonant）の組み合わせである [cv] の単位または、母音 [v] 一つを1音節と数える。日本語は、v 単体（母音）と cv の組み合わせ（子音と母音）で音節が構成されているが、英語は、cv だけでなく、cvc や ccvc など、様々である。学習者は、日本語（カタカナ語）と英語

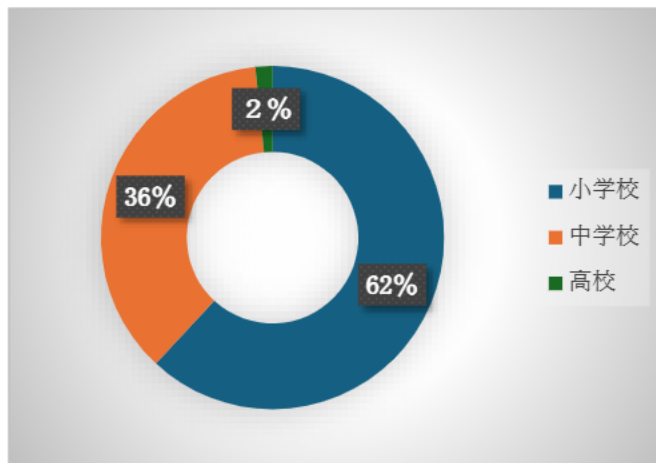
の違いと表記（スペル・見た目）や音（発音）の乖離について認識しなくてはならない。

大学での英語教育において、文字と音の関係を理解させる指導が重要であり、特にカタカナ語と英語の音声構造の違いを認識することが求められている。愛媛大学では、カタカナ語の音節数を数え、英語のスペルと音節数を比較する活動を通じて、音の構造を理解させている。例えば、「サラダ」は日本語では3音節だが、英語では2音節となり、日本語と英語で異なる音声構造を持っている。この違いを認識しないと、リスニングや発話の際に誤認や困難が生じる。学生はカタカナ語に慣れているため、英語の本来の音節数とのギャップを理解することが正確な音声認識と発音につながる。このような指導により、音声と文字の関係を体系的に学ぶことが重要である。

英語教育において、日本語のカタカナ語がもたらす「ネガティブトランスファー(負の転移)」が課題となっている。カタカナ語は日本語の音韻体系に基づいており、英語の音節構造や発音とは大きく異なるため、学習者がカタカナ語に慣れ親しんでいると、英語の正確な発音やリスニングに支障をきたす。さらに、英語では母音を挟まない音節構造（例：「strike」）が存在し、日本語にはない発音の特徴がある。これらの違いを克服するには、英語の音声構造を意識した練習が必要であり、学習者が英語の音に慣れる環境を整えることが重要である。音声学的な理解と練習を通じて、学習者が英語の音声体系を習得することが求められている。

アンケート集計結果

設問1 ご所属の校種を選んでください。



○参加者数 132名
○回答者数 63名
○回収率 48%

設問2 本日の研修について、感想をお書きください。

【小学校】

- ・とても有意義な研修だった。(6)
- ・音韻の特徴とディスレクシアを配慮した指導については、もう少し知りたかった。
- ・会話の始まり方、終わり方を意識していなかったので、参考になった。(6)
- ・会話が多く、授業のような体験型の講義で外国語の指導について楽しく学べた。(4)
- ・活動を交えながら楽しく英語に触れることができ、参考になった。今後の授業に生かしていきたい。(3)
- ・会話の構造については、小学生段階でも分かりやすい形で児童に教えてあげたいと思った。(2)
- ・自分自身が聞き取りと発音などの英語力を今一度勉強し直したい。(2)
- ・Small Talk を教員が実践できた。(2)
- ・英語での会話は緊張したが、拙いながらも自分の伝えたいことが伝わったり会話ができたりしてうれしかった。相手の思いを想像し、楽しく学習できる外国語を目指したいと改めて思った。(2)
- ・コミュニケーションについて学ぶことができた。(2)
- ・実技が多く大変だったが、いろいろ勉強になった。(2)
- ・様々な人との意見交換ややり取りができて良かった。
- ・実際に学校で応用できそうな会話練習が良かった。
- ・ペアでしたことをグループや全体で共有していくという形を外国語活動でもっと取り入れたい。
- ・初めて主任になり、英語を話すことに慣れていないが、実際の大学生の授業を受けられて良い経験になった。
- ・大学入学後すぐの授業を再体験して、小学校の人間関係作りにも共通することがあると分かった。
- ・附属中のAIを活用している授業に関する取組が刺激的だった。
- ・AIの有効的な使い方を学びたくなった。今、できることをバランスよく精一杯やろうと思った。
- ・これからの授業で活用できるユニバーサルデザインについての話をもっと聞きたかった。
- ・AIの活用について興味深く、中山先生の講演は勉強になったが、もっと実際に授業で使える指導法を知りたかった。

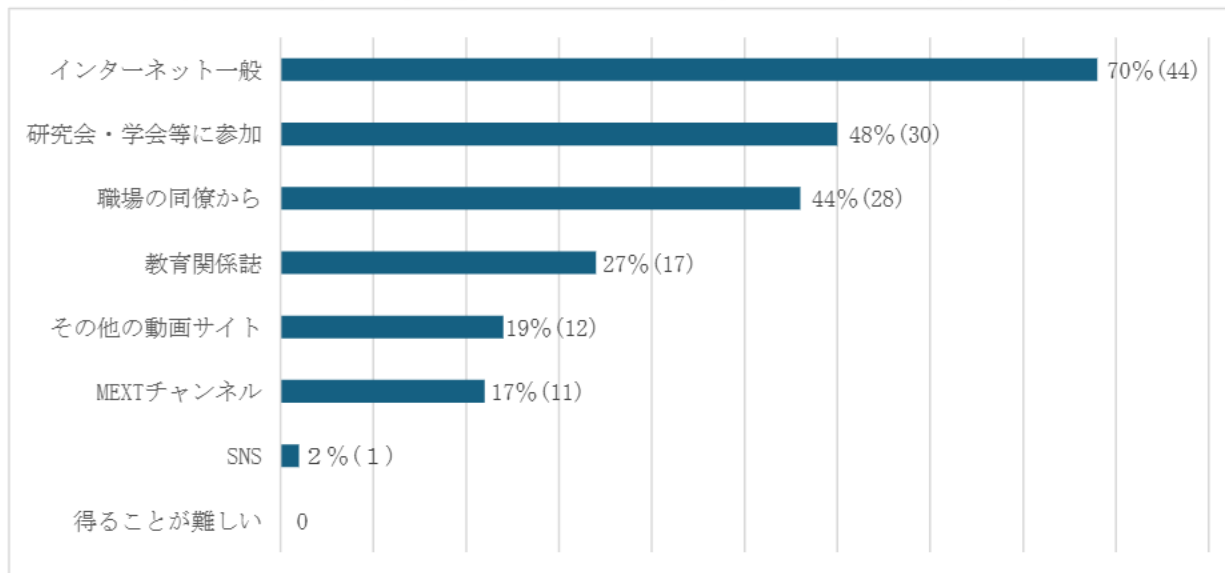
【中学校】

- ・良いものは取り入れて、残すべきことは残すことが大切であり、改めて私たち教員は学び続ける必要があると感じた。(6)
- ・実際に行われている生成A I を活用した授業実践や、英語教育の在り方など、今後の授業づくりの参考となる学びを多く得ることができた。(4)
- ・生成A I の活用や40年前から続く教授法について学ぶことができた。(3)
- ・昔の英語教育を学び、現在の英語教育とリンクさせたい。(2)
- ・英語教育の歴史(変遷)が分かり、新鮮な研修会だった。(2)
- ・改めてインプットの大切さ、アウトプットとのバランスを考えることができた。(2)
- ・様々な人と意見交換を行い、意見が聞けて良かった。(2)
- ・アプローチの仕方は色々あるが、それぞれに利点や注意点がある。生徒の実態や文法内容によって、指導方法や流れを考えているが、今回の研修内容を加味して、自分の授業に生かしたい。
- ・デジタルとアナログのベストミックスも踏まえて、指導法を考えていきたい。
- ・**Small Talk** の段階的指導方法についてよく理解できた。状況別の表現や会話の流し方などの指導もあり、よりオーセンティックな **Small Talk** を学べた。
- ・パターン・プラクティスについて、改めて考えさせられた。
- ・会話の始まり方、終わり方など自然な会話ができるように話を組み立てることが大切だと思った。
- ・自分の日頃の教科経営と照らし合わせて聴くことができ、とても貴重な学びの機会になった。
- ・音声を教えるときはアクセントの強弱を見える化しようと思った。
- ・聞くばかりでなく、活動があり、良かった。
- ・これから小学校や中学校でどのように指導すべきか、これからの現場で生かせるような内容であれば嬉しい。

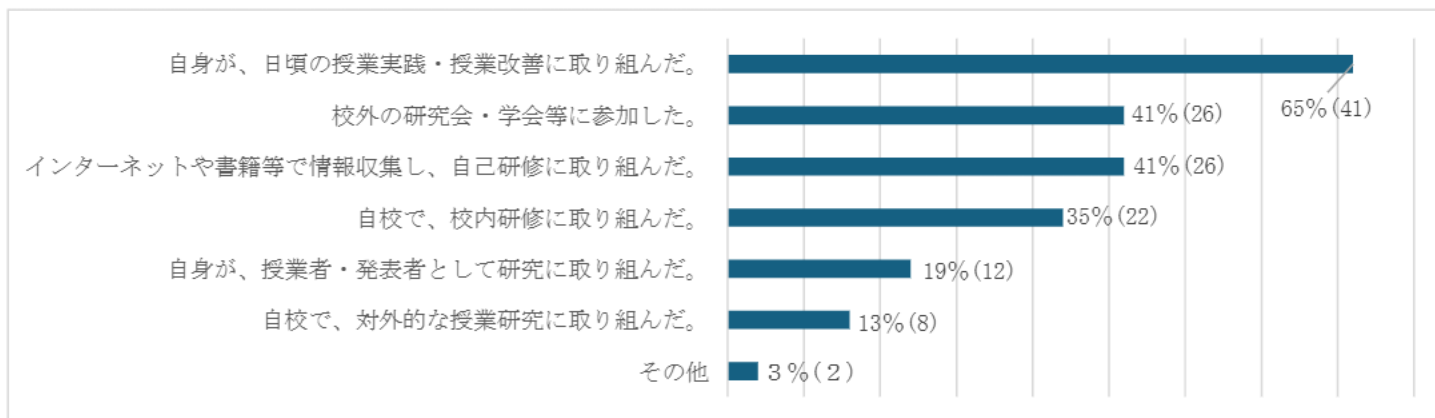
【高校】

- ・小中高大という長い視点から考えることができた。A I を用いた学習とパターン・プラクティス等、非常に歯ごたえのある学習会だった。

設問3 外国語教育に関する情報を、どのようにして得ていますか。(複数選択可・記述)



設問4 外国語教育に関して、自身および自校における、この1年間の成果は何ですか。
(複数選択可・記述)



設問5 外国語活動・外国語科の指導上、課題だと感じていることは何ですか。(記述)

【小学校】

- ・教師自身の英語力 (6)
- ・教員の外国語についての専門性 (3)
- ・授業の準備や教材研究の時間の確保 (2)
- ・少人数での活動の難しさ (2)
- ・ALTやアシスタントとの打ち合わせ時間の確保 (3)
- ・ALTとの効果的なチームティーチングの在り方
- ・小中連携 (9)
- ・もっと中学校の先生方に小学校の外国語について知ってほしいと思う。
- ・中学年から高学年、そして中学校への円滑な接続が難しい。特に書くこと。
- ・grammar, writing の知識・技能を小学校段階でしっかり教えること
- ・小中高と積み上げた学習効果が大学入試問題に生かせるのか。
- ・小学校の段階で児童に、どこまで求めるか。
- ・書く活動、読み取り
- ・コミュニケーションをはずかしがる子どもが多い。
- ・聞き取りと発音の理解が難しい。
- ・目的意識と実践
- ・子どもに表現を身に付けさせること
- ・自分たちで、英文を考えていく授業モデル
- ・児童の個人差、評価のあり方
- ・自身の指導力の向上
- ・学習内容を定着させる時間が足りない。
- ・週2時間で児童の語彙力を高めること
- ・言語活動の充実
- ・アウトプットの機会の提供
- ・授業内で英語を使う場面が少ないこと
- ・児童にどう主体的にコミュニケーション活動をさせるかについて

- ・言語活動が児童の実態や興味に合うものになること
- ・デジタル教科書がもっと児童にとって使いやすいものになること
- ・子どもの思いを大切にして授業を進めていきたいが、子どもの思いを英語にするためには、人手や時間が足りない。
- ・英文を子どもたちが自分達で考える際、添削に時間がかかることもあり、なかなかそのような活動を設定できていないこと

【中学校・高等学校】

- ・小中連携（２）
- ・ICTの活用と学習課題の設定と評価（２）
- ・苦手意識のある生徒が多いこと（２）
- ・あくまでも、コミュニケーションのツールであることを意識すること
- ・生徒のアウトプットの活動をどう取り入れるか
- ・多様な生徒が増えてきていること
- ・1クラスの生徒数が多いこと
- ・予測不能な社会、また多様性を重視する社会を生きる子どもたちにとって、生きた英語を教える必要性を感じている。しかし、学力保障及び進路保障について多くの先生方が悩んでいると思う。愛媛県内の外国語担当者が指導法などをより簡単に情報共有する場所があればいいと思う。
- ・実生活や次の学習につなげる意識をもたせるための働き掛けなど
- ・デジタル教科書の効果的な使用方法について
- ・専門的知識
- ・教師としての指導力、生徒指導、学習のしつけ
- ・コミュニケーション能力
- ・実践的なコミュニケーション
- ・普段の授業で、普段の学習から切り離さずに言語活動を取り入れる効果的な方法や新しい時代に合う英語教育のあり方
- ・外国語習得の意義を伝えること
- ・生徒の実態に応じた効果的な指導方法や活動内容、指導したことをいかに定着させるか。
- ・国語力低下による学習内容の理解度の低下
- ・評価の問題と発問の質の向上

設問6 今後、研修したい外国語活動・外国語科のテーマや内容を教えてください。（記述）

【小学校】

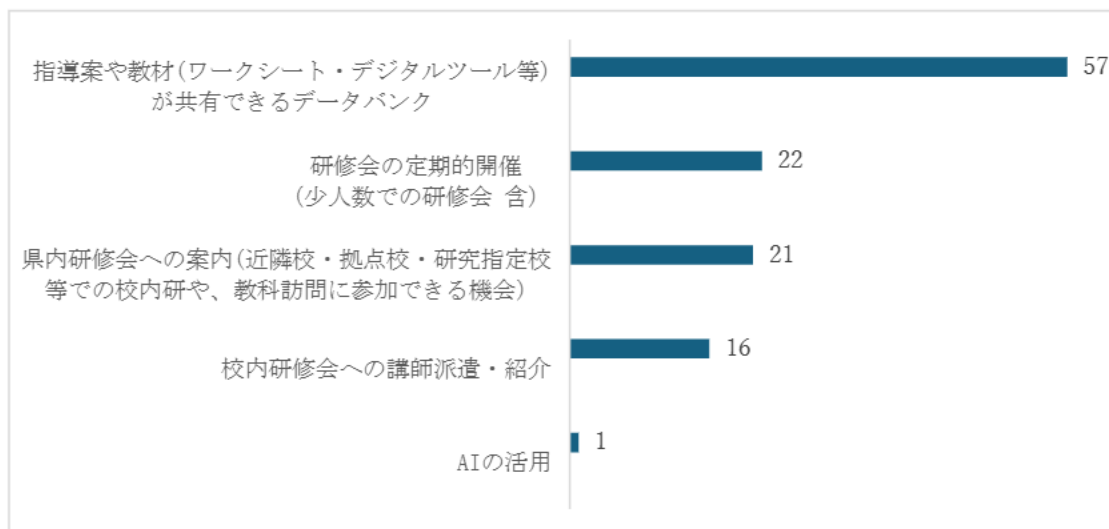
- ・言語活動を取り入れた様々な授業実践について（３）
- ・ALTとのTTの仕方（３）
- ・生成AIの活用、AI時代での教師の役割（３）
- ・子どもが外国語を話すことを楽しむ活動について（３）
- ・授業で使える活動、表現について（２）
- ・アナログ、デジタル両面での個別最適な学習の方法（２）
- ・パフォーマンステストの行い方や評価の仕方（２）
- ・聞き取りと発音について（２）

- ・子どもに身につく英会話指導
- ・英語力の向上
- ・大学入試の問題作成の意図や現在の教育内容と入試問題との整合性
- ・語彙力のアップ
- ・児童生徒が能動的に学習に取り組み、他者との対話を通じて思考を深め、知識を相互に関連付けてより深く理解する学習
- ・諸外国の英語の授業について
- ・国際理解やコミュニケーションを育む外国語教育
- ・小学校の外国語教育に求められること
- ・小中の英語教育の段差や望ましい接続
- ・小中連携、更に言えば高校受験英語の改善
- ・個別の支援を必要とする児童への外国語科での取組
- ・アクティブ・ラーニングのあり方
- ・書く活動における指導の工夫について
- ・児童にとってリアルな場面の単元目標設定
- ・子どもたちが生き生きと活動する外国語活動のあり方

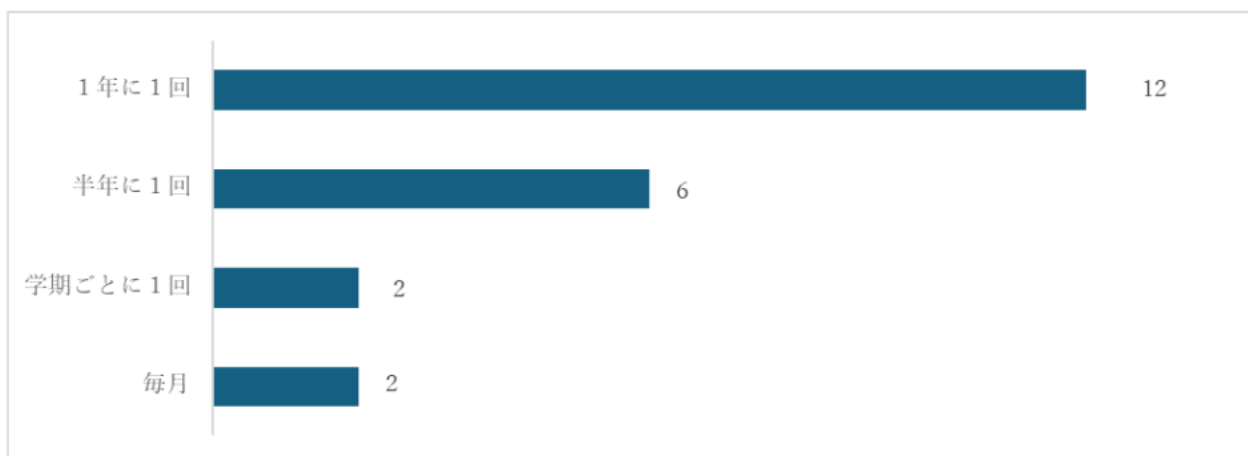
【中学校・高等学校】

- ・A I を活用した活動、授業について（7）
- ・生徒が積極的にアウトプットする活動について（3）
- ・新学習指導要領について
- ・リテラチャーサークルについて
- ・言語活動の実際
- ・英語教育におけるユニバーサルデザイン、A I について
- ・話すこと（発表）や話すこと（やり取り）の評価基準などについて
- ・リテリング、英会話、教室英語
- ・生徒の英語力を上げる効果的な指導方法
- ・教科書の本文を取り扱った授業展開
- ・小学校の先生が、「小学校では書かせることは求められていないのに、中1からガンガン書かせているところにギャップを感じる」と言われていた。それは、中学校の学習指導要領の目標に関する認識不足から起こる状況だと思う。ペーパーテストに関しても未だにこんなテストをさせているのかと思うことも少なくない。ペーパーテストがなくなることはないのだから、ペーパーテストの作り方や評価の仕方は一度じっくり研修した方がよいのではないかと思う。
- ・4技能統合的な言語活動について
- ・効果的な帯活動
- ・生徒が主体的に取り組む学習課題の設定
- ・二極化した教室でいかに授業を行うか。
- ・デジタル教科書の活用について

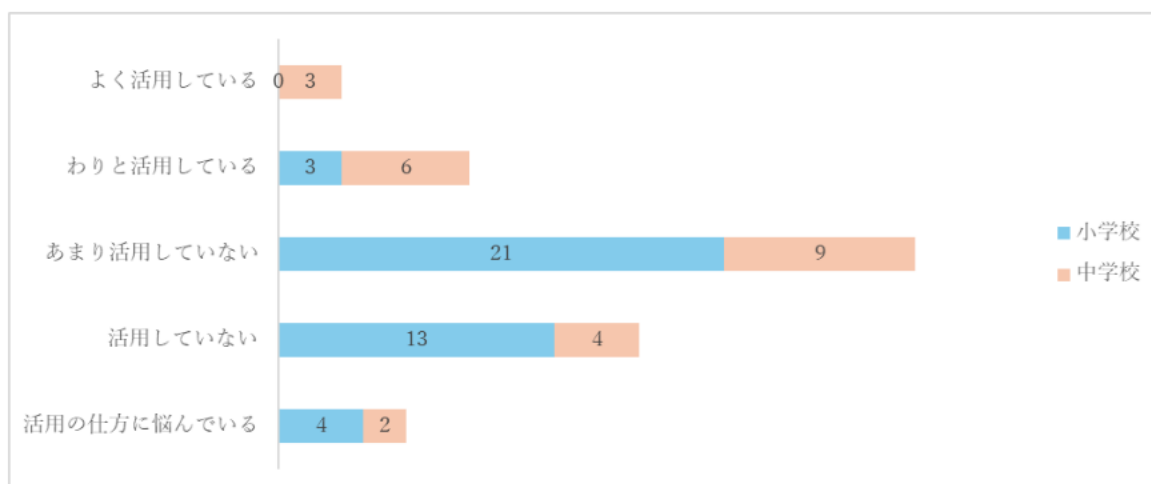
設問 7-1 外国語教育に取り組む上で、もし、あれば活用したいことは何ですか。
(複数選択可・その他の記述可)



設問 7-2 「研修会の定期的開催」を選択した方は、希望する期間を選んでください。



設問 8-1 外国語活動・外国語科の授業時間内、もしくは教材・資料作成の際に、A Iを活用していますか。



設問 8-2 「(よく・わりと)活用している」を選択した方は、その活用例を教えてください。

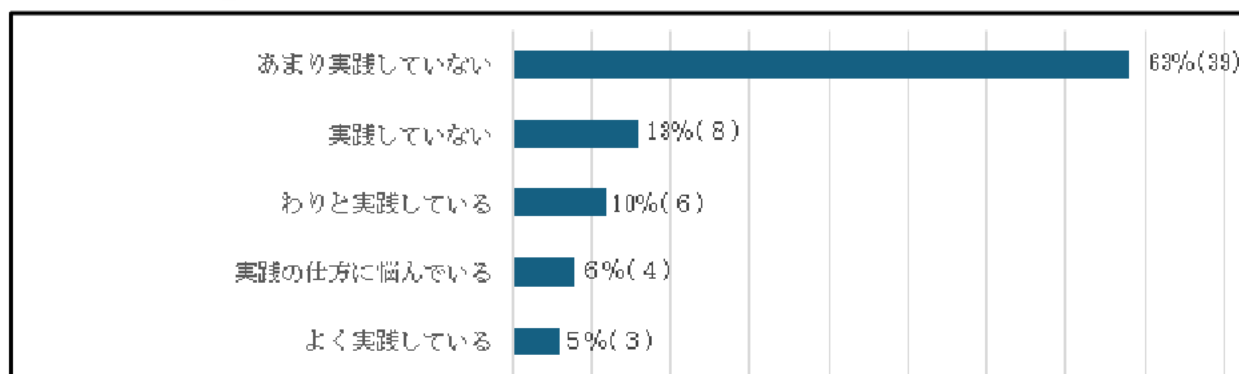
【小学校】

- ・授業のアイデア出し (壁打ち)
- ・英文翻訳
- ・イメージに合う画像の作成
- ・児童が作った文章の添削

【中学校・高等学校】

- ・翻訳や状況設定の英文作成
- ・長文問題の作成やテスト問題の英文チェック
- ・単語テストやリスニングスクリプトの作成、生徒自身による英文添削
- ・授業で使う英文の添削
- ・言語活動のモデル、パフォーマンステストの試験官、スモールトークなど
- ・授業中、生徒からの質問に答える際に確認するため

設問 9-1 外国語活動・外国語科において、「他教科等と関連付けた言語活動の工夫」のある授業実践をしていますか。(その他に記述可)



設問 9-2 「(よく・わりと)実践している」を選択した方は、その実践例を教えてください。

- ・歴史の人物や関係性などを英語で話す活動
- ・家庭科の調理実習、総合的な学習の時間での国際交流会に向けての発表練習
- ・行事に合わせた言語活動および Small Talk
- ・総合的な学習の防災学習を英語だけではなく、全教科で絡めて授業している。
- ・「教科書のテーマについての事前調べ学習を英語でまとめる」、「教科書を読んだ後にその他の要因や現状を調べてプレゼンをする」、ということを章始まりや章終わりにしている。
- ・理科や数学の授業および日頃のニュースに出てくる専門用語やキーワードなどを英単語や英略語で確認している。
- ・職員室で異なる教科の教諭同士で学習内容をシェアし合うことで、言語活動の工夫を心掛けている。

Ⅲ 教員研修実践報告

○ 西条支部の取組

1 はじめに

西条支部では、教科研修会において、毎年、授業公開と研究協議等を行っている。今年度の第3回教科研修会は、西条市立中川小学校で行い、特に「話すこと（やり取り）」の領域における評価と指導の一体化について、活発に意見交換しながら研修を深めた。（令和7年10月30日実施）

2 研修内容


(1) 授業研究【第4学年の実践】


ア 単元名 Alphabet (『Let's Try! 2』Unit 6)

イ 本時の目標

クラスで人気の色を調べるために、ジェスチャーを交えながら好きな色を尋ねたり答えたりして伝え合う。

ウ 本時の展開

展開	時間	学習活動の流れ	○指導上の留意点 ●評価 <評価方法>
問題の発見	10分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 挨拶をする。 オリジナルアルファベット辞典とチャンツでアルファベットの小文字を確認する。 ○ 学習のめあてを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体を使ってアルファベットの小文字を表し、似ている小文字の違いを確認しやすくする。
追究	30分	<p>【Activity 1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ Small Talk 教師の好きな色についての話を聞き、教師の好きな色を当てる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>A : Do you have an "o"?</p> <p>B : Yes, I do. I have an "o". / No, I don't. I don't have an "o".</p> <p>A : It's orange.</p> <p>B : That's right. I like orange.</p> </div> <p>【Activity 2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 友達の好きな色を尋ね合う。(ペア) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>A : Do you have a "O"?</p> <p>B : Yes, I do. / No, I don't.</p> <p>A : "○○○."</p> <p>B : Yes, it is. / No, it isn't.</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 人気調べの結果を発表する。 ○ 教室にいる人の好きな色を尋ね合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ALTとHRTがデモンストレーションを行い、ジェスチャーを交えたやり取りの手本を見せる。 ○ 分からない単語や表現について、ALTやHRTに聞くことができることを事前に伝えておき、児童が安心してやり取りができるようにする。 <div style="text-align: center;">  <p><児童がやり取りする様子></p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 児童の会話の質が高まるように、言語面や内容面において中間指導を行う。

Do you have a “○”? やジェスチャーを使うと、相手により分かりやすく伝えることができる。		
解決	<p>5分</p> <p>○ できるようになったことや分かったこと等を振り返り、ワークシートに書く。</p>  <p style="text-align: center;"><振り返りを発表する様子></p>	<p>○ できるようになったことを賞揚し、次回への意欲を高める。</p> <p>● クラスで人気のあるものを調べるために、相手に伝わるように工夫しながら、好きなものを尋ねたり答えたりして伝え合おうとしている。<観察・記述></p>

(2) 研究協議

- 始めの活動では、児童が自分たちで考えたジェスチャー（指文字）でアルファベットを表現しながら、楽しくチャンツを行っており、とてもよい雰囲気であった。チャンツだけでなく、ALTとジェスチャーを練習する時間もあり、小文字のアルファベットに親しむ様子が見られた。
- 中間指導では、児童が知っている単語を使って質問を発展させ、英語を活用している様子が見られた。児童の活動を丁寧に見取って形成的評価を生かしながら、追加で触れさせたい表現方法について、授業者から例示していた。それらを児童と共に練習する場面があってもよかったかもしれない。その中間指導を基に、星の数で児童が自分の達成度を振り返るようになっていたのがよかった。
- Activity では、授業者としては、ジェスチャーをしてほしかった。しかし、今回は、児童にとってジェスチャーの必要性がないようだった。また、手にワークシートを持っていたため、ジェスチャーをしにくい状況であったようだ。
- Activity では、好きな色を尋ね終わって待っている児童が見られた。終わった後の指示をしておくこと、他の児童に聞きにいいようにしておいて、Activity をどんどんできるようにするとよかったのではないか。
- 振り返りシートで、1回ごとの振り返りを先生からのコメントを付けて丁寧にしていた。

(3) 指導講評（西条市立三芳小学校 教頭 門田 奈美 様）

- HRTとALTの連携により、学習しやすい雰囲気が生まれ、児童は楽しく英語に親しんでいた。HRTは積極的に英語を用いていたが、児童は文脈やジェスチャーから意味を推測しながら理解していた。体を使う活動や指文字等、児童の特性を生かした工夫も見られた。
- 中間指導では、児童の気付きも生かしながら、教師がねらいを意識して指導を行った。後半の活動に入る前に使いたい表現を事前に確認することで、やり取りが更に豊かになる。
- 副教材の活動を基に、児童の実態に合った目的や場面を設定して明確に伝える等、持続可能な形で授業改善を図ることが大切である。

3 おわりに

評価の観点を示して、参観者も授業者と一緒に児童の発表を見取るという実践的な研修により、評価の仕方と評価を生かした指導について研修を深めることができた。今後も指導力の向上を目指して、西条支部として教科研修会を充実させていきたい。

○ 今治・越智支部の取組

1 はじめに

今治・越智支部では、毎年夏休みに夏季研修会を行っている。小学校・中学校の教員を交えた研修会であり、異校種間の交流ができ、各校種の視点を取り入れた有意義なものになっている。今年度は出前講座として、愛媛大学教育学部の立松大祐教授に来ていただき、「小中連携を意識した言語活動の在り方」と題する話題提供を起点にして、代表者3名による実践発表の後、グループ協議を行った。
(令和7年8月1日実施)

2 研修内容

(1) 小中連携を意識した言語活動の在り方について（立松教授ご講演）

ア 令和5・6年度「英語教育実施状況調査」から、小学校・中学校の連携に関する状況や、取組の好事例について確認・共有を行った。小学校との連携に取り組んでいる中学校の割合は82.8%で、よく行われている形態は情報交換や交流である。また、小中で教科書やパフォーマンス動画を相互に見合う研修会を実施したり、中学校英語教師が小学校で乗入れ授業を実施したりと、様々な好事例が共有された。そのことから、今回の研修会も有意義な場になることが確認された。

イ 言語活動とは、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動（『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』より）」である。単に発音練習をしたり、言語材料について理解したり練習したりするための指導とは明確に区別され、コミュニケーションの目的・場面・状況を設定し、児童・生徒同士が本当に伝え合う必要性のある活動である。

ウ 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編」では、言語活動に関して様々な観点で言及されている。題材や活動について、「児童が進んでコミュニケーションを図りたいと思うような、興味・関心のある題材や活動」を扱うことが重要とされており、「聞いたり話したりする必然性のある体験的な活動を設定することが大切」と述べられている。

エ 児童・生徒にとって、必然性のある具体的な場面設定の中で、「誰に」「何のために」という相手意識や目的意識をもって活動できるようにすることが大切である。例えば、「この単元で学習した内容（言語材料）を使って、今治市の魅力を伝えよう。」とするのではなく、「9月にALTのバリー先生の妹さんのメイさんが今治市に遊びに来ます。今治市のおすすめを考えて伝えよう。」と設定し、加えて「スイーツが好き」「趣味はスポーツとスポーツ観戦」といったようなメイさんの情報を伝えることによって、相手意識や目的意識をもたせる。

オ 小中連携に関しては、言葉は使いながら学ぶという意識をもつことが重要である。例えば、小学校では豊富な語彙の学習を行ったり定型表現に慣れ親しんだりし、中学校では定型表現から文法規則、文型の学習へ移行するなど、定着、活用からより複雑な文法体系の獲得を目指して学習を行う必要がある。小中でCAN—DOリスト型到達目標を設定し、達成状況の把握・検証を行うことも連携を深める手立てである。

(2) グループ協議と情報交換について

ア 以上の立松教授の講演を踏まえ、11月に行われる教科等研究大会該当単元の言語活動について、各自が行ってきたことやアイデアを、小学校、中学校に分かれてグループで共有した。

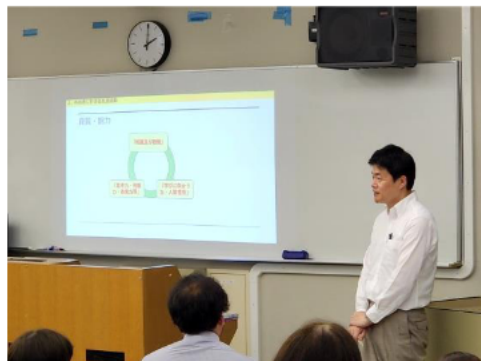
イ 小学校では、「単元で使用する言語材料の取扱い」を中心に協議が行われ、「毎授業の最初に Small Talk の時間を取り入れ、少しずつ言語材料に慣れていく」「単元の間で確認

のパフォーマンステストを行い、最終活動への見通しをもたせる」など、様々なアイデアが出された。

ウ 中学校では、「必要性のあるコミュニケーションの目的・場面・状況の設定」を中心に協議が行われ、「ALTの趣味や人柄に関することを題材とする」「授業者だけでなく、ALTとも日々ミーティングを行い、授業をブラッシュアップしていく」などの意見が挙げられた。



〈講演会の様子〉



〈立松教授のご講演〉



〈実践発表の様子〉



〈グループ協議の様子〉

3 おわりに

- 実践発表では、児童・生徒の実際の様子や今後の課題を共有することができ、有意義な情報交換の場となった。研修会後のアンケートでは、自校でも取り組んでみたいという意見が挙げられた。
- 立松教授に言語活動についてお話しいただいたことによって、改めて授業で行うべき言語活動について考えることができ、2学期以降の授業に活用していく視点が広がった。
- 教科等研究大会で実施する単元についてグループ協議を行ったことによって、様々な観点から単元を見ることができ、授業者の授業構築の一助となった。当日は、小中共に本研修会でブラッシュアップされた授業を実施する予定である。
- 今後とも、各校種の指導のあり方について共通認識を図りながら、つながりある指導を心掛けていきたい。

○ 東温支部の取組

1 はじめに

東温支部には小学校7校、中学校2校がある。東温支部の外国語委員会は、小中合同で活動をしており、研究授業や夏季研修会を通して、市内の教員で情報共有を行っている。小中連携を意識し、中学校へ進学した際に、英語学習への抵抗感を少しでも和らげられるよう研修を進めている。

今年度は4年生の外国語活動で、外国語専科教員とJTEとで授業研究を行った。高学年の外国語科に向けて英語表現に慣れ親しむ態度を養うことを意識した授業で、1人1台端末を活用しながら児童同士でコミュニケーションを図る実践を行った。(令和7年7月4日実施)

2 研修内容

(1) 授業研究 【第4学年の実践】

ア 単元名 What time is it? (『Let's Try! 2』 Unit 4)

イ 本時の目標

時刻や日課の言い方や尋ね方に慣れ親しむとともに、世界の国や地域によって時刻が異なることに気付くことができる。

ウ 展開

学習活動	時間	主な発問と児童の意識の流れ	○指導上の留意点 ◎評価
1 挨拶と前時の復習をする。(全体)	10	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時に学習した日課はどんなものがありましたか。 ・ Wake-up Time ・ Breakfast Time ・ Study Time ・ Lunch Time ・ Snack Time ・ Homework Time ・ Dinner Time ・ Bath Time ・ Bed Time ・ Dream Time ○ キーワードゲームをしましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体動作を伴わせながらJTEの後に繰り返し発音させることで、英語での表現に慣れさせる。 ○ キーワードゲームを通して、前時に学習した表現の定着を図る。
2 本時のめあてを確認する。	10	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>何時にどんなことをするか、友達にインタビューをしよう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今日のキーフレーズは「What time is it?」です。まず、あなたは何時にどんなことをしていますか。学習アプリのカードに線を引きましょう。 A : Wake-up Time What time is it? B : It's 6 a.m. A : Dinner Time What time is it? B : It's 7 p.m. 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師が「What time is it?」の質問をして児童に答えさせることで、後のインタビュー活動につなげる。
3 友達と何時にどんなことをしているのかインタビューし合う。(ペア)	15	<ul style="list-style-type: none"> ○ 友達に尋ねたい日課を選んで、インタビューカードを準備しましょう。 ○ 同じグループの2人の友達に、何時にどんなことをしているかインタビューしましょう。 A : Homework Time What time is it? B : It's 6 p.m. ○ インタビューをして、誰が、何時にどんなことをしていたか発表しましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ インタビュー前に、質問文や答え方の表現をJTEの後に繰り返し発音させる。 ◎ 「What time is it?」の表現を使って、友達の日課の時間を正しく尋ねることができる。【知】

		<p>○ 学習アプリの提出箱にカードを提出させ、全体で共有する。</p>
<p>〈使用したワークシート〉</p>	<p>〈インタビューの様子〉</p>	
<p>4 他国との時差について考える。</p>	<p>5 ○ アメリカのライブカメラの映像を見て、気付くことはありませんか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 10 p.m.と書いてあります。 ・ 日本は昼なのにアメリカは夜で、外が暗いです。 ・ 時差があるからだと思います。 	<p>○ 他国のライブカメラの映像を見せ、時差があることに気付かせる。</p> <p>◎ 世界の国や地域によって時刻が違うことに気付くことができる。【知】</p>
<p>5 学習をまとめる。</p>	<p>5 ○ 今日の学習で分かったことや気付いたこと、楽しかったことなどを発表しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の日課の時間を聞くことができました。 ・ 何時か聞きたい時は、「What time is it?」と尋ねたらいいことが分かりました。 ・ 国や地域によって時差があることに気付きました。 	<p>○ 児童の感想で出てきたことを板書し、本時の学習を振り返らせる。</p>

(2) 授業の成果 (○) と課題 (●)

- 外国語専科教員とJTEとの役割分担が明確になされており、上手く連携を図ることができていた。
- 導入からインタビュー活動に至るまでの活動の流れが練られており、自然な形で児童がインタビュー活動に取り組むことができていた。
- 英語でのインタビューが終わった後に、日本語ではあるが、日課の時間について児童同士の対話が広がっている様子が見られた。インタビュー活動に主体的に取り組むことができていた児童が多かった。
- 1人1台端末を使った活動の内容や分量が児童にとって適切であり、飽きることなく楽しみながら授業に取り組むことができていた。
- 1人1台端末を使ったインタビュー活動は一定の成果があった反面、友達との対話よりもタブレットの操作に意識が向いてしまう児童もいた。英語表現に慣れ親しむという本時の目標を達成する上では、紙媒体のワークシートにした方が効果的であった児童もいる。
- 前時までの授業で学習したセンテンス等を黒板に掲示しておくこと、これまでの授業の流れが意識できる。

3 おわりに

研究授業を通して、児童が外国語に慣れ親しむことができる授業について研修を深められたとともに、デジタルとアナログのベストミックスについても考えることができた。今後も小・中学校の連携を図りながら、外国語好きの児童が増えるよう、更に研究を深めていきたい。

○ 上浮穴支部の取組

1 はじめに

上浮穴支部では、「コミュニケーションを図る資質・能力の育成」を研究主題として、実践を重ねている。

本単元では、「身の回りには活字体の文字で表されているものがあることに気付き、活字体の小文字とその読み方に慣れ親しむこと」、「相手に配慮しながら、アルファベットの文字について伝え合おうとすること」を目標としている。単元構成は全4時間で、第1時、第2時では、教科書の絵に描かれている英単語の中からアルファベットを探するという活動を行った。この活動を行うことで、英単語はアルファベットの文字列によって構成されているということを理解するとともにアルファベットについて慣れ親しむことができた。

今回の授業では、「友達が選んだロゴマークを当てよう！」を学習課題として実践した。慣れ親しんだ表現を使って、クイズを作ったり答えたりしてコミュニケーションを楽しむ中で、目的をもって小文字を見て、その名称を読んだり認識を深めたりするようにした。（令和7年10月28日）

2 研修内容

(1) 授業研究【第4学年の実践】

ア 単元名 Alphabet (『Let's Try!』Unit6)

イ 本時の目標 身の回りにあるアルファベットの文字クイズを出したり答えたりできる。

ウ 本時の展開

学習活動	教師の主な発問と児童の反応	○指導上の留意点●評価
1 グリーティングや日付の確認を行う。	○ Hello, everyone. How are you? ・ I'm fine./I'm tired./I'm hot. ○ What's the date today? ・ It's October 28th.	○ 教師やALTがジェスチャーをしながら会話をすることで、児童にボディランゲージの大切さを伝える。
2 本時のめあてを設定する。	友達が選んだロゴマークを当てよう！	
3 好きな色を当てるクイズをする。	○ ペアの人が選んだ色を当てるクイズをしましょう。 (主なやり取り) A: What's my favorite color? Please guess. B: OK. Do you have a "w"? A: No, I don't. I don't have a "w". B: Umm. Do you have a "b"? A: Yes, I do. I have a "b". B: Wow! Do you have an "e"? A: Yes, I do. I have an "e". B: I got it. It's "Blue". A: That's right. I like blue.	○ まず、教師と児童、ALTと児童がやり取りの手本を見せることで、児童がスムーズに活動を始められるようにする。 ○ 質問の仕方や答え方を確認しておく。

<p>4 ロゴマークを当てるクイズをする。</p>	<p>○ ペアの人を選んだロゴマークを当てるゲームをしましょう。</p> <p>〈主なやり取り〉</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>A: What's my favorite signboard? Please guess. B: OK. Do you have a "w"? A: No, I don't. I don't have a "w". B: Umm. Do you have a "c"? A: Yes, I do. I have a "c". B: Wow! Do you have an "f"? A: Yes, I do. I have two "f". B: I got it. It's "Coffee Shop". A: That's right. I like Coffee Shop.</p> </div>	<p>○ ペアワークが終わった後は、自由に友達とペアワークをさせる。</p> <p>● 友達のお気に入りのロゴを知るために、文字から得られた情報をもとに英単語を推察できる。また、分からない場合には、追加の質問をして答えの英単語を考えようとしている。【様態観察】</p>
<p>5 振り返りをする。</p>	<p>○ 今日の活動の振り返りをしましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どの英単語なのかを当てるのが楽しかったです。 ・ a や e などのアルファベットは英単語によく使われているということが分かりました。 	



〈教師と児童のやり取り〉



〈ALTと児童のやり取り〉



〈児童同士のやり取り〉

(2) 授業の成果 (○) と課題 (●)

- 同じような活動を繰り返し行ったことで、児童同士がスムーズにコミュニケーションを図ることができた。
- 相手が選んだ英単語を当てる活動を行ったことで、英語で会話することの楽しさを味わうとともにアルファベットの文字列に親しむことができた。
- ロゴマークを当てる活動は、選択肢が多すぎて、探すことが難しい児童もいた。
- 会話が行き詰まったときに、日本語でヒントを与えたり、答えを教えたりしている児童がいたので、そのような場合にどうしたらよいかを事前に指導しておくべきだった。

3 おわりに

今後も、「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力の育成」を達成するために、積極的に児童同士や児童と教師が英語で話す活動を取り入れていくようにしたい。

○ 附属支部の取組

1 はじめに

附属支部では、児童が他者に配慮しながらコミュニケーションの目的・場面・状況に応じて思いを伝えることや、既習の表現を活用して粘り強くコミュニケーションに向き合うことを目指し、本年度より「伝え合うことに挑戦し続ける子どもの育成」を研究主題として実践を重ねている。

本実践は、「小学校生活の思い出について、自分が本当に思っていることを英語で友達と伝え合うなら、どのように表現すればよいか」を学習課題として取り組んだものである。夏休みの思い出を伝え合った前単元での学びを生かしながら、自分なりに表現を考え、繰り返し言語活動を行った。単元終末では、相手意識や目的意識をより明確にもつために、附属小学校に来たばかりの英語を専門教科とする校長先生に思い出を紹介する活動を設定した。
(令和7年11月4日実施)

2 研修内容

(1) 授業研究【第6学年の実践】

ア 単元名 My Best Memory (『Junior Sunshine 6』Lesson 6)

イ 本時の目標 相手を意識しながら英語表現を組み合わせ、小学校生活の思い出について友達と伝え合うことができる。

ウ 本時の展開

学習活動	予想される子どもの意識の流れ	支え方(○) 評価(●)
1 本時の目標を確認する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 自分の本当の思いが伝わるように、学級の友達と思い出を伝え合おう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・相手に分かるように伝えたい。 ・友達が伝えようとしていることもちゃんと理解したい。 ・思い出の出来事だけでなく、自分が感じた気持ちまで分かってほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時に至るまでの思いを想起できるように、学習計画を立てた際の写真を提示する。 ○ コミュニケーションの目的を明確に意識できるように、小学校生活の思い出を学級の友達と話したいと考えた理由を問う。
2 小学校生活の思い出を友達と伝え合う。	<div style="border: 3px double black; padding: 5px;"> どのように表現すれば、自分が本当に言いたいことを英語で相手に伝えられるのだろう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が考えてきた表現は、友達に伝わるのかな。伝わらないとしたら、それはどうしてなのだろう。 ・相手が頷いたり質問してくれたりしたら、分かってくれたということかな。 ・相手が笑顔になったら、自分の思い出を分かってくれたようで嬉しくなる。 ・微妙な反応なら、(もう1回/ゆっくり/短く区切って)話してみようかな。 ・ジェスチャーではなく、言葉で相手に伝わったら英語が上達した気がする。 ・いろんな友達と話すと、知らなかった言葉の組合せがたくさん見つかる。 ・やっぱり習っている単語や簡単な単語を使うと、相手の反応がいい気がする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話しやすい環境を選べるように、グループトークとペアトークの両方の場を設ける。 ○ 文法や単語の正確さだけにとらわれないように、不正確でも自力で伝え切った表現を聞き取り、全体で共有する。 ○ 相手に伝わったかどうかを主観的な感覚で判断しないように、相手の反応や質問について振り返る時間を途中で設ける。その際、困ったことや気付いたことがあるかを尋ねて、後半の活動に生かせるようにする。 ○ 相手を意識しながら何とか英語で伝える意欲が高まるように、教師自身も日本語での指導と英語での指導を使い分ける。

3 本時の活動を振り返る。	<p>今日の活動を振り返ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の言いたいことを伝えるためには、完璧な英語ではなくても、相手が分かる単語や表現で話すことが大事なんだ。 6年間共に過ごした友達と思い出を分かり合えた。伝え合ってよかった。 校長先生にも頑張って伝えてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 相手を意識して話せたかを振り返れるように、視点を設けた振り返りシートを用いる。 ● 相手を意識しながら英語表現を組み合わせ、小学校生活の思い出について伝え合うことができたか。(様態・振り返りシート)
---------------	---	--

以下は、授業前後の振り返りシート(資料1・2)と思い出を伝える活動の様子(写真1)である。

<p>私は自分の気持ちを伝えるということをとことん頑張りました。でも、自分の言葉の引き出しをいくら開けようとしてもなかなか自分の言葉にぴったりの英語を見つけることができませんでした。今までのものを組み合わせたら気持ちを表せることもあったし先生から教えてもらって引き出しが増えることもありました。日本語をそのまま英語にするのは本当に難しいと思いました。</p>	<p>今日が最後の作成時間でした。1年生の時のことをしっかり伝えることができるプレゼンが作れたと思います。次回はtokingの時間なのでしっかり伝えることができるようにしたいです。私が頑張りたいことはプレゼンだけでは伝わらないことをどう助言するかです。その時のアドリブでより相手に理解が深まるように出来たらいいなと思いました。一番の目標は、相手に伝えたいことをしっかり伝えることです!</p>
---	--

〈資料1 授業前の振り返りシート〉

*talking

<p>今回実際にやってみて相手に伝えるのは難しいと感じました。特に相手の反応を見ながら対応するのが難しかったです。そのほかにも相手の聞いてみている一人一人の違った表現があると気づきました。今度はスライドをやる時に新しい単語を増やしていってみたいですね。</p> <p>【自分の満足度：実際】 1(低)～10(高)段階で 7 【相手の理解度：予想】 1(低)～10(高)段階で 5,2</p> <p>そう考える理由は… 自分はできたと勘違いとしてそのまま僕はやってしまいました。相手をよく見ると分かってなさそうで、意外と難しく、早く読みすぎず発音よくしゃべる大切さを学びました。</p>	<p>今日は、ぼくの6年間の思い出をほかの人と伝えました。今日は普通に伝えあって「へ～」とかじゃなくて「こんな伝え方もあるんだ。」とか感じてそれを自らの自分の英語の力に変えていければいいなと感じました。みんなと一緒に過ごしてきたけれど、全然知らない思い出とかもあって「え～！」など驚きがありました。</p> <p>【自分の満足度：実際】 1(低)～10(高)段階で 8 【相手の理解度：予想】 1(低)～10(高)段階で 9</p> <p>そう考える理由は… 今回は、前回と違ってわからない言葉はあまり使わないようにしたので自分でずらすと読めて、かなり満足できました。けれど少し間違ったりしたのでこれが自分の満足度です。相手の理解度は、やっぱり残りの「1」はまだ完璧には等しくないのので9にしました。</p>
--	--

〈資料2 授業後の振り返りシート〉



写真1 学級の友達や校長先生に思い出を伝える様子

(2) 授業の成果 (○) と課題 (●)

- 言語活動の直後に振り返りを行うと、「伝え合う活動が1回だと物足りない」「次はもっと自分の思いを伝えられる」と感じやすく、児童が繰り返し伝え合うことの良さに気付きやすかった。
- 相手が分かりやすい単語や表現を使うことは、相手にとってのコミュニケーションの満足度を上げるだけでなく、話し手である自分の満足度を上げることにもつながった。
- 「何のために話すのか」という問い掛けに時間をかけ過ぎると、他者と伝え合う楽しさや喜びを求めようとする児童の率直な思いを遮ってしまいそうなきがあった。目的意識の問い方が重要である。
- 相手への伝わり方を実際に試して知る場が少ないと、教師が表現を工夫するポイントを示しても、児童が自分自身で表現を再構築することにはつながりにくかった。

3 おわりに

今後も、児童にとって相手意識や目的意識のある言語活動を積み重ね、「伝えたい」「理解したい」という思いを大切にしながら粘り強くコミュニケーションに挑戦する姿の実現を目指したい。

○ 八幡浜支部の取組


1 はじめに


八幡浜支部では、市教育研究集会の外国語科部会において、年間1回の授業研究を実施している。今年度は、22名の小・中学校の教員及びALTが参加し、八幡浜市立双岩小学校において、授業研究に取り組んだ。
(令和7年10月28日実施)

2 研修内容

(1) 授業研究【第6学年の実践】

- ア 単元名 This is my hero. (『Blue Sky elementary 6』Unit 5)
- イ 本時の目標 いろいろな先生に自分のことをより知ってもらうために、自分のあこがれの人について伝える。
- ウ 研究の視点 主体性を育む中間指導の在り方
- エ 本時の展開

学習活動・学習内容 (・予想される児童の反応)	時間	○指導上の留意点 ◎評価
1 あいさつをする。	1	
2 英語の歌を歌う。	1	
3 前時の学習を振り返り、本時の課題を確認する。	5	
いろいろな先生に、自分のあこがれの人について伝えよう。		
<ul style="list-style-type: none"> ・校内放送は原稿を見ながら伝えたけど、同じように伝えていいのかな。 ・初めて会う先生もいるから、挨拶や自己紹介をしよう。 ・ジェスチャーを使ったり、写真を見せたりして伝えることができるね。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> (児童の紹介文の例) I'll show you my hero. This is Otani Shohei. He is a baseball player. He is good at running. He got a prize. He is gentle and cool. I respect him. </div>		<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時は、前時と相手や目的・場面・状況が変わっていることを押さえる。自分のことを知ってもらうためには、前時と同じ伝え方でよいか発問する。 ○ 校内放送で伝えたことについて振り返り、より良い表現の仕方を吟味するよう促す。
4 表現や伝え方を話し合い、ペアで練習する。 ・先生方に伝えるから、難しい表現を使ってみたいな。 ・自己紹介で何を伝えようかな。	5	○ 机間支援を通して児童の様子を観察し、中間指導で確認しておいた方がよい表現を把握する。
5 表現を確認するために、1回目の中間指導を行う。 ①英語での言い方が分からない言葉を共有し、児童同士で考える。 ②既習表現を振り返る。 ③目的・場面・状況に応じた英語表現を確認する。	5	○ 英語表現を主体的に考えさせたいという点から、正確性を求め過ぎないようにする。
		 <p>〈中間指導の様子〉</p>
6 いろいろな先生に、自分のあこがれの人について紹介する。 (より良いコミュニケーションを図れるように、2回目の中間指導を行う。) ・相手を見ながら伝えているね。 ・ジェスチャーを使いながら、ゆっくり伝えているね。	20	<ul style="list-style-type: none"> ○ 伝えた先生にコメントをもらうなど、安心して伝える雰囲気づくりに努める。 ○ 「先生方にもっと自分のことを知ってもらうために、工夫できることはないかな。」と問い掛け、更によりよくコミュニケーション

<p>・「紹介した人を先生は知っていますか」と質問すると会話がはずむね。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>自分の思いが伝わるための表現 I like my hero. 会話をつなげるための表現 Do you know? Do you like?~?</p> </div> <p>(時間次第では、全体で発表をする。)</p>  <p>〈参加者とのやりとりの様子〉</p> <p>7 本時の振り返りをする。</p> <p>8 あいさつをする。</p>	<p>ンを図ることができるように促す。</p> <p>◎ 聞き手に自分のあこがれの人について知ってもらうために、人物の特徴やしたことについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて相手に伝えている。 【思・判・表】〈行動観察〉</p> <p>◎ 聞き手に自分のあこがれの人について知ってもらうために、人物の特徴やしたことについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて相手に伝えようとしている。 【主体性】〈行動観察・振り返りシート〉</p> <p>7 ○ 児童の頑張りや良かった点などを褒めることにより、次時への意欲を高める。</p> <p>1</p>
--	---

(2) 授業後の研究協議

- 中間指導の際に、実際にやり取りしている様子を動画で見せたことで、表現の仕方について児童自身に課題に気付かせることができた。
- 教科書の表現にとどまらず、児童の伝えたいことを素直に表現できるように、様々な語句や表現に触れさせていたことが豊かな表現力を育むことにつながった。
- 中間指導の後には、ジェスチャーを取り入れたり、アイコンタクトを意識して話したりする姿が見られ、児童の意識の変化が感じられた。
- 小学校の授業を参観することで、小学校で学習した内容や表現が中学校での学習につながっていることを改めて感じる事ができた。
- 「校内放送で下学年に伝える」「授業を参観した先生に伝える」「近隣校の6年生にオンラインで伝える」といった場面設定により、児童が目的意識や相手意識を持って主体的に活動に取り組むことができた。
- 中間指導を通して、児童の表現の幅がさらに広がった。
- 指導者による様々な仕掛けや声掛けにより、英語を「話したい」、自分のことを「伝えたい」という気持ちが高まった。
- 教室環境や事前準備が十分にできている。毎時間の授業の積み重ねが感じられた。

(3) 指導助言 (八幡浜市立白浜小学校 校長 木村 良太 様)

- この単元は、「人を紹介する言語活動」を通して、英語で「伝えたい気持ち」を表現する力を育てることが目標である。指導者は、子どもが「自分の言葉」で伝えることを重視し、完全な英語よりも意欲的な表現を認める姿勢が大切だと考える。また、「伝える力」を育てるためには、①「伝えたい」という気持ちを生み出す場面づくり、②言いたいことをサポートする環境づくり、③言語材料を使えるようにする工夫、④ペア・グループ活動の充実、⑤振り返りと自己評価の五つが鍵となる。今回の授業では、これらが十分にできていた。
- 中間指導は、子どもが英語を「使いながら身に付ける」授業づくりにおいて不可欠な要素であり、言語活動と組み合わせることで、より効果的な学習につながるように思う。

3 おわりに

今年度は、公開授業や研究協議を通して、主体的に学び、豊かに表現する児童生徒を育成するための外国語科の指導の在り方について研修を深めることができた。今回の授業のように、目的意識や相手意識を大切に言語活動の積み重ねや効果的な中間指導の在り方を模索しながら、主体的に学び、豊かに表現する児童・生徒の育成を目指して、今後も研究を更に進めていきたい。また、スムーズな接続を図るためにも、小・中学校の連携を強化して、系統性を意識した指導に努めていきたい。

○ 西宇和支部の取組

1 はじめに

西宇和支部では、小・中学校合同で外国語委員会を編成している。今年度は、伊方町立三崎中学校で、町内の教職員及びALTが参加しての授業公開及び研究協議を行った。

(令和7年6月11日実施)

2 研修内容【中学校第2学年の実践】

(1) 授業研究

ア 単元名 My Dream (『New Crown』 Lesson 3)

イ 単元目標

○ to不定詞(名詞用法)などを活用して、職場体験について書かれた文の内容を読み取る技能を身に付けることができる。【知識及び技能】

○ 職場体験で行きたい場所について、to不定詞(名詞用法)などを用いて、事実や自分の考えなどを伝え合い、正確に書く技能を身に付けることができる。【知識及び技能】

ウ 本時の展開

学習内容 (形態)	時間	○学習活動 ・予想される生徒の反応	○指導上の留意点 ◎評価
1 Warm-up (全体→ペア)	10	○ 挨拶・歌 ○ Small Talk (既習事項の復習)	○ Reaction & Question で会話を続けさせる。
2 Review (全体)	3	○ 前時の振り返りをし、学習課題を確認する。	○ 本時の学習課題に向けて、to不定詞(名詞用法)の使い方について振り返らせる。
職場体験でどこに行きたいか、理由を付けて伝えよう。			
3 Oral introduction (全体)	3	○ Picture cards やジェスチャーなどを手掛かりにして、分からない単語があっても想像力を働かせながら内容を聞き取る。 ・Hana が少し困っている。	○ 教師との対話の中で、内容を確認する。 ○ デジタル教科書を活用する。
4 Listening & Reading (個人) → (全体) → (個人)	13	○ 教材文の概要を把握し、タスクについて考える。 (音声→黙読→音読→確認) ・職場体験の行き先で悩んでいる。 ・Hana は多くのことに興味がある。 ○ 二次元コードを用いて、新出単語や読み方を各自で確認する。	○ 一部の生徒とのやり取りにならないようにする。 [発問 → 考えさせる → 挙手して発言させる] ◎ to不定詞を活用して、文の内容を読み取る技能を身に付けることができる。 【知識・技能】
5 Think about yourself (個人→ペア)	13	○ トークテーマについてペアで会話する。 A: Where do you want to go for the day-at-work program? B: I want to go to an elementary school.	○ スムーズに活動を行わせるために、職業の写真などを黒板に提示する。 ○ 難しい場合は、例文を提示しながら英文を作るサポートをする。
	3		

6 Writing (個人)	4	C: I want to be a farmer like my father. ○ 自分の考えを整理して書く。	◎ 職場体験で行きたい場所について、to 不定詞を用いて、事実や自分の考えなどを伝え合い、正確に書くことができる。 【知識・技能】
7 Reflection (全体)	1	○ 振り返りをする。	○ 言いたいことや分からなかった表現について、全体で共有することで、次に生かせるようにする。
8 Greetings			

(2) 研究協議の意見

- 新しいデジタル教科書のコンテンツを上手に使いながら、英語のシャワーを浴びる 50 分間で、生徒の集中力がずっと持続されていた。
- 導入部でリアクションの仕方の例示があり、Small Talk でも生かされていた。小学校でも参考にしたい。
- 自分の言いたいことの英語表現が分からない時、既習事項を生かした表現のアイデアをみんなで出し合い、創り上げている授業だと思った。
- “I want to go to ～.” の後に “Why ～ ?” と今まで習った英語を使って会話を広げているところが良かった。
- 高学年を教えるようになり、教える領域が増え、時間制約の中で手いっぱいになっている。少しでも、「英語を知りたい・楽しい」と子どもが感じられるよう指導していきたい。
- 本文の発音練習で、初めは短いフレーズからはじめて、だんだん語数を増やしていく方法が参考になった。
- ペアで話す活動を取り入れているが、子どもの人数が増えると、把握が難しくなってくる。ALTにも入ってもらうが、いかに子どもに寄り添えるかが課題である。



(机間支援の様子)

(3) 指導助言 (伊方町立大久小学校 教頭 杉山 剛 様)

伊方町は小学校にも毎時間ALTが来校し、共に学習することができる恵まれた環境である。小学校3・4年生は「聞く・話す」、そして、5・6年生になると「読む・書く」領域が入ってくる。授業者は、ALTと連携を深めて、授業を充実させながら各領域の力を伸ばしてほしい。小中高一貫して言語活動を軸に置いた授業展開が求められている。つながりを生かしながら、まずは、小学校で外国語を好きになる素地を作り、中学校に子どもたちを送れるよう取り組んでもらいたい。

3 おわりに

今年度は、コミュニケーションを図る資質育成のための領域統合型の言語活動であったかを視点に研究授業が行われた。小学校と中学校の外国語担当教員、ALTそれぞれの視点でより良い授業を行うための改善点などを共有することができた。今後も互いに連携し、どの学年においても、児童・生徒が「外国語が楽しい」と感じられるよう、研究を深めていきたい。

○ 北宇和支部の取組

1 はじめに

北宇和支部では、ALTとのTTで日々の授業改善に取り組んでいる。鬼北町内には、3名のALTが在籍しており、数か月ごとにローテーションで1名が来校している。外国語科の授業には常にALTが関わるという環境の下、異なる国の文化や価値観に触れながら学ぶことができる。本校は、小規模校であり、児童一人一人とじっくり向き合いながら学びを支えることができる環境にある。その一方で、児童数が少ないため、対話の相手が限られてしまうという課題もある。そこで、教師やALTが児童同士の間をつなぎ、互いの考えを引き出すように意識して授業を進めている。今回は、第6学年の実践を紹介する。 (令和7年10月15日実施)

2 研修内容

(1) 授業研究【第6学年の実践】

ア 単元名 We live together. (『Here We Go!6』Unit5)

イ 本時の目標 好きな動物を演じて Who am I?クイズをしたり、スライドを通して動物の気持ちを考えたりする。

ウ 本時の展開

学習活動	学習形態 (時間)	○指導上の工夫 ・ICTの活用 ☆評価(観点)【方法】
1 Greeting ウォーミングアップをする。	一斉 (5分)	○ リズム良く進め、児童が安心して英語学習のモードに入れるようにする。
2 Small Talk 既習表現の復習をする。	一斉 (5分)	○ 教師やALTとの対話を通して、既習表現を復習し、英語を話しやすい雰囲気を作り、今日のめあてにつなげる。
好きな動物になりきってクイズをしたり、動物の気持ちを考えたりしよう		
3 Practice 新出表現を知る。	一斉 (10分)	○ 楽しく練習しながら新出表現が定着するようゲームを行う。
You eat~. / You live in~. / You have~.		
4-(1) Activity① Who am I? クイズをする。	個人 一斉 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 伝える内容を整理させるためにロイロノートを活用する。 ☆ 新出表現や関連語句を使って、動物の特徴を英語で表現している。(知・技)【行動観察】 ・ スライドを提示しながら、英語で語り掛けたり児童の発話を促したりする。 ☆ 動物の暮らしや気持ちに気付いている。(思・判・表)【発言・記述】
Hint 1, I live in ~. Hint 2, I eat ~. Hint 3, I have ~. Who am I?		
4-(2) Activity② 動物の暮らしや気持ちを知る。	一斉 (10分)	○ 次時への見通しがもてるように、今日の授業で学んだことやできるようになったことを振り返るよう声掛けをする。

5 Reflection 振り返りをする。	個人 (5分)	○「動物の思いを伝えるポスターを作る」という次時のめあてを持たせる。
--------------------------	------------	------------------------------------



<新出表現を使ったゲームをする様子>



<クイズを出し合う様子>

(2) 授業の成果 (○) と課題 (●)

- 学級担任とALTの表情や身振りを生かした語り掛けが、児童の理解を助け、安心して発話できる雰囲気を作った。
- 英語で伝える中で、あえて一つ情報を変えて話したり、相手の発話を聞き取りながら正しい内容を考えたりするなど、思考を伴う対話が生まれた。こうした活動が、既習表現の定着と理解の深化に有効であった。
- スライドを通して動物の生息環境や人間の影響を知り、「I want clean water.」などの表現を用いて伝え合うことで、動物の気持ちや環境問題に気付く児童の姿が見られた。
- 学級担任の問い掛けや活動設定に頼る場面も見られたため、児童同士が自ら英語で伝え合おうとする姿をより引き出す必要がある。
- 児童が主体的に発話できる時間を十分に確保するため、活動展開のテンポや区切り方を見直す必要がある。
- 発話の正確さだけでなく、児童の気付きや思考の深まりをどのように評価するのが難しい。「何ができるようになったか」「どんな気付きがあったか」を自分の言葉で整理できるように、CAN-DOリストなどを活用して振り返りの質を高めたい。

3 おわりに

本実践を通して、児童が英語を使って自分の思いを伝えようとする姿が少しずつ見られるようになった。英語の正確さも大切だが、「伝えたい」という気持ちが発話を支える原動力となることを改めて感じた。ALTとの協働やスライドを活用した語り掛けは、児童の興味・関心を高め、学びを自分ごととして捉えるきっかけとなった。一方で、活動の盛り上がりの中で、学習のねらいや評価の観点をより明確に意識付ける必要性も感じた。今後は、児童が、英語を通して感じたことや考えたことを互いに共有し、さらに深めていけるような授業づくりを目指したい。

○ 南宇和支部の取組

1 はじめに

令和7年度の南宇和支部は、小学校6名、中学校8名の計14名の会員で活動した。毎年小・中学校が合同で研究授業を行っている。今年度の研修は、愛南町立御荘中学校で1年生の授業公開及び研究協議、実技研修を行った。研究協議や実技研修の際には、学校種に分かれて、授業の工夫や日々の悩みなどを協議したり、授業に役立つ実技研修を行ったりした。

(令和7年11月19日実施)

2 研修内容

(1) 授業研究【中学校第1学年の実践】

ア 単元名 Useful Expressions

イ 本時の目標 目的の場所への行き方を尋ねたり、説明したりすることができる。

ウ 授業の工夫

(ア) Google Forms を活用した単語の復習

(イ) デジタル教科書を活用した新出単語の確認・発音・対話例の練習

(ウ) 校舎案内の視覚的補助

(エ) ALT との対話練習



<ALT との発音練習>



<言語活動の様子>



エ 研究協議

○ 授業者の振り返り

- ・生徒はいつも通りの姿で学習していた。
- ・教科書の内容が少し難しいため、オリジナルのモデル対話文を書いたプリントを使用した。
- ・生徒の学力に差があるが、全員が前向きに取り組んでおり、本時の目標はおおむね達成することができた。

○ 参加者からの感想

- ・よい雰囲気の中で授業が進められていた。
- ・ALTがゆっくりと発音練習させていたところは良かったが、1回目はゆっくりでもいいが、2回目は自然なスピードで練習してもよいのではないかな。
- ・自作のプリントが分かりやすく、生徒の理解を効果的に支援できていた。
- ・Google Forms を使った単語テストに興味を持った。
- ・全国学力・学習状況調査に向けて、タイピングにも慣れさせておいたほうがよい。
- ・中学校では、文法や「書くこと」についての指導が必要となってくるので、どうしても苦手意識をもってしまう。小学校から中学校に円滑につなげるために何ができるのかを考えて小学校では授業をしていきたい。

- ・中学校の教員が小学校での授業を見ることや、小学校の教員が中学校での授業を見ることはとても意味のあることだと思う。授業の雰囲気や言語活動の工夫など、感じ取ったことをそれぞれの学校で生かして授業をコーディネートしていきたい。

(2) 小学校部会での実技研修（指導者：愛南町立平城小学校 末武 真理 教諭）

ア 発音練習

英語の資格や免許を持っていなくても、児童の外国語指導に当たっている教員が多くいる。そのため、外国語専科として小学校で指導をしている末武先生に、アルファベットの名前読みと音としての読み方の指導をしていただいた。

イ フォニックスについて

小学校と中学校の円滑な接続が課題であると考え、中学校になると急に学習することが増え、「書くこと」も加わるため、小学校では楽しく活動していた児童も、苦手意識をもってしまふことがある。少しでも「書くこと」に抵抗が少なくなるように、末武先生が指導の中で大切にされているフォニックスを紹介していただいた。中学年のうちからアルファベットの音に親しむことで正しい発音ができるようになり、音とアルファベットが結び付くようになるため、正しい綴りで書くことができるようになることを目指している。



<小学校部会の協議の様子>

ウ 教材・教具の共有

参加者でICT機器を活用したワークシートやスライドの共有をした。専科教諭が工夫を凝らした教材の共有はとてもありがたく、参考になるものであった。



<フォニックスワークシート>

行きたい	want to go	知りたい	want to know
訪れたい	want to visit	勉強したい	want to study
見たい	want to see	読みたい	want to read
食べたい	want to eat	泳ぎたい	want to swim
飲みたい	want to drink	スキーしたい	want to ski
買いたい	want to buy	登りたい	want to climb
会いたい	want to meet	プレイしたい	want to play
話したい	want to talk	写真を撮りたい	want to take photos

<want to~を指導するためのスライド>

エ 参加者からの感想

- ・末武先生の教材・教具の工夫がとても参考になった。
- ・教師自身が外国語の授業に前向きに取り組んでいこうという気持ちになった。
- ・目の前にいる子どもたちにとって、どんな学習や支援が必要なのかを考えて授業を組み立てていきたい。
- ・小学校と中学校での言語活動の工夫の差や授業の雰囲気の違いを大きく感じる。それぞれの校種で、楽しく分かる授業の工夫が課題である。

3 おわりに

今回の研究会は、中学校での授業研究であったため、小学校の教員にとっては、中学校の授業の雰囲気を感じる貴重な機会となった。小学校での授業においてどのような工夫が必要かを深く考える時間となった。一方、小学校から中学校への円滑な接続をするためにも、研究会の内容の工夫が必要であると考え、今回の研究協議は、小・中学校が別々で行ったが、それぞれが忌憚のない意見交換ができる場の工夫をしていきたい。

IV 研修実践を振り返って

★カリキュラム・マネジメント

- ・2学年にわたる目標、バックワードデザインで考えられた学年・学期・単元・毎時の目標が必要となる。
- ・小規模校においては、伝え合う相手の数が少ないという課題を抱えている様子が見られる。近年はオンライン等で、交流する相手を広げていく取組も見られるが、逆転の発想で、小規模ならではのよさを伝え合いに生かす方法もあると思われる。例えば、学級担任・ALTともに少人数の中で深い相互理解が日常的に得られることから、他教科等との関連から深まりを構成する手立てもある。小規模校ならではの良さを生かした授業づくりなど、各校の課題に応じた実践が共有できるとよい。

★言語活動

- ・「伝えたい」という気持ちを生み出す目的・場面・状況を設定するなど言語活動の工夫がなされている。英語を使って伝えたい気持ちを原動力とし、そこに基づく思考力・判断力・表現力を高める言語活動を大切にしようとする工夫も見られた。

★中間指導

- ・中間指導が重要であるという認識が広がっている。児童の気付きを生かした中間指導の工夫も見られた。今後、中間指導の質を高めるためには、授業者が意図をもって中間指導を行う必要がある。どのような学習活動の中で、どのようなスモールステップを設定すれば目標に到達するかを考えることが、中間指導の質を高めるカギではないかと考える。

★ICT活用

- ・1人1台端末を活用した学習は、扱う内容や分量が児童にとって適切であり、楽しみながら授業に取り組めるよさがあった。視覚的資料を活用する際には、聞き手のリアクションを大切に授業づくりを目指していきたい。
- ・今後、AIを含むICTのよりよい活用方法を共有することに向けて、ソフトウェア等の具体的な活用場面・活用方法の情報共有も求められる。
- ・学習者が活動に適した資料を自ら選択できるようにすることが重要である。言語活動を豊かにするための資料（紙・デジタル）の特性を踏まえ、自分の目的に応じて使い分け方を考えたり判断したりする力を育てていきたい。この活動の経験を繰り返していくことで、デジタルとアナログのベストミックスに取り組んでいきたい。

★小中連携

- ・小・中で教科書やパフォーマンス動画の共有や、中学校の英語教師の乗り入れ授業などの実施、CAN-DOリスト型到達目標の設定・達成状況の把握など事例が挙げられた。各支部において小・中合同の研修を行う際は、校種の目標に関する情報共有を前提としたものにするのが望ましい。特に、高学年の「読む」「書く」についての認識にずれがあり、高学年の学習に負荷をかけるものにならないよう、配慮する必要がある。各校種の指導のあり方について共通認識を図りながら、つながりのある指導が今後も期待される。

おわりに

本研究集録を作成するにあたり、多忙な校務の中、情熱を持って実践を積み重ねてくださった各支部の先生方、ならびにご指導を賜りました諸先生方に心より感謝申し上げます。

今年度、私たちは、よりよいコミュニケーションを図り、多様な対話を通して深く学ぶ児童の育成を目指して研究を進めてまいりました。単なる知識や技能の習得にとどまらず、子供たちが自らの思いを伝えたいと願い、多様な考えに触れる中で、言葉の壁を越えたつながりを実感する、そのような授業のあり方を追究した一年でした。

本集録に収められた実践報告は、子供たちが相手を尊重し、試行錯誤しながらも「対話」を楽しみ、学びを深めていく姿の結晶です。これらの歩みは、本県の外国語教育が着実に、そして力強く進化している証でもあります。

また、夏季休業中の「外国語教育研修会」では、愛媛大学 中山 晃 教授を講師にお迎えし、ペアワークなどの実技を交えたご講演をいただきました。具体的でわかりやすくご指導いただき、これからの実践に生かすことができる内容でした。

研究に「完成」はありません。本集録が、明日からの授業を創る一助となり、先生方の更なる探究の種となることを願っております。

結びに、ご指導・ご支援を賜りました愛媛県教育委員会をはじめ各市町教育委員会、教育関係諸機関の皆様や本研究集録作成にご協力いただきました全ての皆様に重ねてお礼を申し上げ、終わりの言葉とさせていただきます。

令和8年3月

愛媛県教育研究協議会外国語委員会

副委員長 神野浩彦

小学校外国語活動・外国語科部会役員名一覧表

役 職	職 名	氏 名	勤 務 校
委員長	校 長	豊島 政一	松山市立久谷中学校
副委員長	校 長	桐山 真美	松山市立清水小学校
副委員長	校 長	神野 浩彦	松山市立久米小学校

〈事務局〉

役 職	所 属 部	氏 名	勤 務 校
事務局長	総 務 部	東地 範子	松山市立味生第二小学校
事務局次長	総 務 部	土居 真美	松山市立石井北小学校
事務局次長	総 務 部	高木 仁	松山市立堀江小学校
事務局次長	研 究 部	吉見香奈子	松山市立たちばな小学校
事務局次長	研 究 部	清水 麻記	愛媛大学教育学部附属特別支援学校
事務局次長	研 究 部	藤井 達也	松山市立雄郡小学校
事務局次長	研 究 部	和田 郁	愛媛大学教育学部附属小学校
事務局次長	研 究 部	井上 仁司	松山市立福音小学校

〈支部長〉

支 部		氏 名	勤 務 校	総務担当	研究担当
東 予	四国中央	松下 綾子	四国中央市立三島小学校	○	
	新 居 浜	中川 美和	新居浜市立金子小学校	○	
	西 条	鈴鹿 侑子	西条市立氷見小学校		○
	今治・越智	会田 憧夢	今治市立九和小学校		○
中 予	松 山	中塚 佑子	松山市立久米小学校	○	
	東 温	高須賀文明	東温市立南吉井小学校		○
	伊 予	山口 歩	松前町立松前小学校	○	
	上 浮 穴	大野 拓人	久万高原町立久万小学校		○
	附 属	和田 郁	愛媛大学教育学部附属小学校		○
南 予	大 洲	越智真由美	大洲市立大洲小学校	○	
	喜 多	竹場 千紗	内子町立小田小学校	○	
	八 幡 浜	中井 志歩	八幡浜市立喜須来小学校		○
	西 宇 和	白石 美保	伊方町立大久小学校		○
	西 予	玉ノ里美穂	西予市立三瓶小学校	○	
	宇 和 島	大塚 泰紀	宇和島市立岩松小学校	○	
	北 宇 和	土居 優子	鬼北町立近永小学校		○
	南 宇 和	成宮 春香	愛南町立一本松小学校		○
合 計				8	9